

Title	契沖書入本源氏物語の探索：養寿庵旧蔵源氏物語をめぐって
Sub Title	
Author	池田, 利夫(Ikeda, Toshio)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1977
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.36, (1977. 3) ,p.84- 99
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	森武之助教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00360001-0084

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

契沖書入本源氏物語の探索

——養寿庵旧蔵源氏物語をめくって——

池 田 利 夫

契沖の源氏物語への注釈書として知られるのは源註拾遺であり、これは契沖の晩年、元禄九年七月十九日、五十七歳の折に草稿を成した上、翌々年の同十五年正月五日に一枚を終えて完結している。契沖は元禄十四年一月二十五日に六十二歳で入寂しているから、丁度その満三年前のことである。契沖が国文学の研究に本格的に取組み出したのが、万葉代匠記執筆の依頼を受けてからであり、それが四十歳を過ぎた、いわば比較的後年に端を発しているのは注意すべきであるが、代匠記初稿本に筆を執り始めて二年程経ったかと思われる貞享二年、即ち四十六歳の三月に、源氏語彙略解とも言うべき源偶篇二冊が書かれている。奥書によつてこれが「源氏の詞を見安くしてうひまなびの便ともなん」という目的であつたとは言え、巻別いろは順に語句を排列し、略注を加えた形式は、元和年間の古活字版から当時までにも数種刊行されている「大和詞」「大和詞大成」の類を明らかに襲つている上、また解釈の内容は、殆んどが湖月抄の受け売りであつて、契沖の新見が極めて乏しい作品と言えるであらう。そして契沖の源氏学は、さきの源註拾遺までの十年余の間に、北村季吟説の安易な受容から、それへの批判の書を述作するに至る変貌を遂げたのである。従つて、元禄九年、旧著として既に自身不本意であつたに違いない源偶篇が、「源氏大和言葉巻」と改題され、著者の名もなしに京都、江戸の書肆から刊行されたのは、恐らく契沖の関知しえなかつたところではないか、と思われる。

契沖が注釈書を成す準備作業として、あるいは執筆ノート、資料集成として本文への書入本を作製したのは、代匠記、古今餘材抄に

対する寛永板本万葉集（自筆）、正保板二十二代集（写し）への書入が三手文庫に遺されているのも知られるが、源註拾遺のように湖月抄への逐条的な私案の開陳という内容から推察すると、湖月抄への書入本の存在が浮かびあがってくる。同じく季吟の大和物語拾穂抄への書入に始まるらしい大和物語への書入本の存在（三手文庫蔵）は、この想定を一層確かなものにするように思える。そして、湖月抄に書き入れた段階の以前か以後か、あるいは書入をあくことなく繰り返す契沖の態度から見てその前後の時期それぞれ両方に、源氏物語本文への書入本が存在したことも、容易に推定される。決して根拠のない推定ではない。

今井似閑は、契沖書入本源氏物語の存在をどうも知らなかったらしい。似閑が、現に三手文庫に蔵する似閑本代匠記、古今餘材抄の奥に書付けた契沖業績表とも称すべき書目一覧は書入本にまで及んでいるが、物語では、竹取、伊勢、大和、宇津保の各物語と、栄花物語が伝えられているのみで、源氏の名は見えない。似閑は「此外家集などに書入多けれどとくたくたしければかゝす」と書き添えているが、源氏物語のような浩瀚な作品をこの「家集など」の中に入れていたとは到底思えない。

一方、契沖の遺著やその写しは海北若沖にも多く伝えられた。遺書は夙に散佚してしまつたが、この書目は今に見ることができ、内閣文庫に蔵する袋綴の写本一冊、外題に「圓珠菴契沖師行實并遺書目録」とあるのがそれである。この「圓珠庵遺書目」と内題にある目録は「附門人海北若沖」と注記されていて、二人の蔵書に区別のないのが難点ではあるが、個々の書名の下に細注を施してあるのが便利である。これは彰考館蔵の「若沖蔵書目録」とほぼ同じ内容であるが、筆頭に見える「一萬葉代匠記若沖本別六十一」「一同素本契沖改點書入二十」などは代匠記の成立や伝来に一資料を加えるし、「一朝もよひ契沖熊野紀行」とあるのは、これまでに知られぬ契沖の作品である。最も多いのは「一蜻蛉日記契沖三」「一更級日記契沖一」の類で、源氏に関しては「一源氏物語契沖首書」と見える。「首書」とするのはこれのみであるが、契沖書入のある源氏物語五十四帖を、若沖は手にしていたのである。ただその後、この本の消息を聞かない。

契沖の伝記研究の上で、明治時代に先駆的役割を果たした宇田川文海は、大正十二年十月十日に至って、嘗て契沖が延宝二年、三十五歳の時より数年閑居した、泉州萬町の伏屋長左衛門旧宅へ初めて赴いた。そこで文海は、契沖書入とおぼしき源氏物語を披見したのである。大正十四年八月刊、宇田川翁喜寿記念会発行の「喜寿記念」と題する本の「阿梨闍契沖追加」の章、「(二)伏屋」の項を少し長

いが引用しよう。

此の外に阿闍梨の書と言ひ伝へられてゐる「源氏物語」に小註を加へた小形の写本（端本）が、一冊あつた。時間がないので細に目を通す事が出来なかつたが、私の眼には阿闍梨の筆に成たものとして映つた。又、教冊の写本があつた。是は源氏物語の一の巻を一冊に書き、是に朱にて傍註を加へたものである。本文は何とも言へぬが、傍註の朱書は阿闍梨の書風に見られた。其所に出されたのは、東屋、蜻蛉、手習、早蕨、総角の五巻であつた。私の考では、阿闍梨は此家に閑居の中に、国学を研究し、源氏物語にも精通し、前の小冊子に小註を試み、更に一の巻を一冊に書いて、之に細註を加へたものではなからうかと思つた。而して、「此の写本は是だけですか」と尋ねると、主人は首を掉して「イエ、此の写本は大本と小本と二様あつて、総計五十冊以上、契沖阿闍梨文庫と書いた、古い一の本箱に入れてあるのを、上から抜いて是だけ持て来たのです」と云ふ答、私は五十冊以上と聞いて、源氏が全部註されてある事を知り、いよいよ興味を持つたが、全部を出して貰つて、目を通す暇がなかつたから、仔細の鑑定は再来の日を約して、「是が阿闍梨の手に成たものならば、後に阿闍梨の著はされた『源註拾遺』の原稿とも云ふべきものであつて、阿闍梨の遺物として、尤も貴重なものであるから、大切にしておかねばならぬ」とだけ言ひおいた。

結局文海が見たのは僅か一部で、文字通り一見したに過ぎないから、「是が阿闍梨の手に成たものならば」といささか自信なげな言いまわしになつてゐるが、所蔵が伏屋宅であり、契沖阿闍梨文庫と書いた古い本箱に五十冊以上もあると聞けば、契沖自筆書入本の源氏物語である可能性は大きいであろう。伝来から考へて、若沖の見た源氏とは異なるらしいが、当然、十分な検討を加へるべき伝本と言わねばならない。そしてこの本は、戦後になつて坊間にあらわれたらしいのである。

久松潜一博士の「契沖伝」には、さきの若沖藏書中の源氏物語契沖首書本への言及と、文海が、伏屋で見たと云ふ書入本の簡単な紹介があるにはあるが、それを実見されたという記述がない。ところが、人物叢書所収の「契沖」略年譜、元禄九年の条に「源氏物語五十四帖」（契沖自筆書入・伏屋家旧蔵）はこのころ成るか」という記載がある。年代をここに想定されたのは、源註拾遺の成立とからめてのことであろうが、実際に調べられたかどうか、嘗て直接お訊ねしたことがあつた。博士のお話では、昔、伏屋に赴かれた

時も、やはり文海のように、一部をちらりと見せられた程度であったが、戦後の古書売立ての時に、この本が箱ごと出されていたのに驚かれたという。しかし、その折も十分に調べられずにいたが、ただ「空心」という署名があったので、契沖自筆の書入であったと思つており、その後の行方についてはわからないといわれた。ところがその本は現在円珠庵蔵書が一括寄託されている大阪府立中之島図書館に、納入されていた。これを教えてくださった多治比都夫氏が、どうも自筆ではないらしい、と言われるように、われわれの知る契沖の筆跡とは隔るように見受けられたが、相当数の帖末に「空心」の署名があった。その後、久松博士も改めてこれを御覧になり、嘗ての古書売立てで御覧になった本であることを確認されたが、筆跡については、やはり否定的になられ、ただ「空心」という署名がいかにも重みを持つのと、箱書に「養珠庵旧蔵」（伏屋にあった契沖の寓居は「養寿庵」とあることから、たとえ筆跡が疑わしいからとは言え、内容上の精査が必要であらうという結論に達した。後日、私は数日間大阪に滞在して、調査に従つた。

文海が聞いたように、それは古い一つの本箱に入っていた。黒ずんだ渋茶色の大きな長方形の櫃で、外箱の寸法は縦三一・七、横四七・五、高さ二九・五センチ、内箱は側面がくり抜いてあって、横から手がさし込めるようになっていた。箱の表中央に、縦一一、横七・九センチの白紙が貼ってあり、「養珠庵蔵／契沖文庫」と墨書されていた。この丁度裏側に当る外箱の内側にも、ほぼ同じ大きさの紙に同文が書かれて貼ってある。嘗て文海と面談した伏屋の主人は「総計五十冊以上」と言ったが、その後若干佚したのか現在は写本四十八冊であり、「大本と小本と二様あって」というのはほぼ当っていた。全体を見たところ、まさしくそうした感じではあるが、敵密に言えば、四種に分けられる。書誌学で言う用語とは幾分離れて、それらを仮に小本、中本、大本、樹形本と呼ぶと、小本は桐壺を例にして縦二一・一、横一三・九センチのやや細長の本で、以下、空蟬、紅葉賀、花宴、禰、花散里、濤標、蓬生、絵合、松風、薄雲、朝顔、乙女、玉鬘、初音、胡蝶、螢、常夏、野分、楨柱、梅枝、藤裏葉、柏木、横笛、鈴虫、幻、匂宮、紅梅、椎本、夢浮橋の三十一冊がこれに当る。装丁は、以上の中の本と、樹形本一冊を除くと、中本と大本とを含めた四十六冊が袋大和綴で、或る時期に補修され、大低は元表紙の上に、共通して白い楮紙の、一見共紙のような表紙が全部に付けられた上、同一筆跡で、巻名すべてが漢字のみで中央に打付書されている。その折、裁断もされたようで、注の文字が一部欠けてしまった。なお空蟬は、連歌書などとは異

なって縦長ではあるが、複式列帖装に後からくるみ表紙をつけ、同じく白のこよりで大和綴に改装してあるので、小本の中では寸法が、縦横はほ五ミリ程大きくなっている。

中本と呼ぶのは夕顔の巻一冊で、縦二五・一、横一七・九センチ、ついで大本は葵の巻を例にして縦二七、横二一・六センチで、以下、明石、御幸、若菜上、若菜下、夕霧、竹川、橋姫、総角、早蕨、寄生、東屋、浮舟、蜻蛉、手習の十五冊がこれに当る。榊形本は帚木の一冊で、縦一九・一、横一九・一センチであり、列帖装、料紙が他と異なつて斐紙である。外題はなく、表紙に「寛永六年^{三月十五日}」と契沖が生まれる十一年も以前の年号が書かれ、本文の筆跡からも別の本と見えるが、朱による書入が他と同筆なので、それ以後の伝来は等しくするのであろう。以上を要するに、この源氏物語四十八帖は、若紫、末摘花、須磨、関屋、篝火の六帖を欠く伝本で、中本一冊、榊形本一冊を除いては、小本三十一冊と大本十五冊とに大別されるのである。

一体、何故に大きさがこのように異なるのか全く詳かにしない。本文は小本で毎半葉五行、六行、八行に写すのが見られ、大本は、八行、九行、十行、十一行の四種に区別される。そして各一冊の中本は七行、榊形本は十行に写されている。和歌はすべて改行一字下げであり、問題とする書入は、大部分の巻に朱、および墨で行間に記されている。朱墨いずれの書入れもないのは、寄生、浮舟、蜻蛉、夢浮橋の四帖で、宇治十帖の大略後半に当るから、最後にまで至らなかつた状態、と言つて良いであらう。

本文は数筆に分けられるが、朱の注は、色調に変化はあるものの一筆と思われる。片仮名交り文の多い墨注もまた同筆に見えるが、朱に比べて、施されている巻がすくない。そしてこの本にとって最も注目すべき「空心」の署名は、過半の三十二冊の尾丁の、本文末行について墨書されているのである。箱書と併せて、契沖との関連はいよいよ濃いものがある。

文海が伏屋で一部を見、話に聞いた源氏物語の契沖書入本がこれを指すことは疑いがない。「契沖阿闍梨文庫」とあつたという箱書も、常に契沖を「阿闍梨」と呼ぶ文海のならわしから挟入されたか、その口調につられて伏屋の主人がそう言ったかのことで、問題とするに足りないであらう。文海が見せられた五帖はすべて大本であつた筈で、蜻蛉のみは全く注を欠くが、総角には朱墨の書入が、早蕨では墨注に朱の合点、句点が、東屋では朱注のみが見られ、手習でも極く僅かながら、朱注を見たであらう。ただ、総角、早蕨、

東屋の三帖には尾丁に「空心」の署名があった筈であるのに、文海は短い時間だったので見落したらしい。円珠庵には頻りに出入りして、契沖の筆跡には通じていた文海ではあったが、「傍註の朱書は阿闍梨の書風に見られた」とあるのも、細かい字であったから故なしとしないが、やはり時間の制約のためもあったらう。

ついでながら、文海が見た「源氏物語に小註を加えた小形の写本（端本）が一冊」とあるのは、以上の本とは異なるのであろう。文海は契沖がこの「小冊子に小註を」試みた上で源氏本文への書入を行なったプロセスを想定しているようであり、五帖の方を「源氏物語の一の巻を一冊に書き」と区別して述べているから、この方は源氏の本文に傍注という形態ではなかったらしい。あるいは、源氏物語の上巻ではなかったか、とも思う。この本であると、朝日版契沖全集が刊行された大正末年には大阪の殿村家にあったから、その後いく程もなく移譲されたことになる。しかしそれは、今次の戦災で焼失してしまったが、現に穂久邇文庫に蔵する下巻によると、確かに端本ではあるものの決して「小形の」「小冊子」でないところが心もとない。源偶篇であれば、文海の考えたプロセスは逆にしなければならなくなり、それはその折に精査がなされたわけではないから措けるとしても、やはり別の本と考えた方が良さであろうか。

二

すこし煩わしいが、のちの調査の参考のため、内容の検討に入る前に、各巻の本文、書入の外見の状態のあらましを一帖ごとに誌しておこう。欠けている帖をわかりやすくするのに、巻序数を巻名に冠した。

1 桐壺（改装表紙の外題。以下同じ）。小本、本文六行。現表紙の下にある元表紙に「きりつは 一卷」と外題があり、その裏から朱注はじまる。傍注は殊んど朱筆ながら、墨で引歌一首を書き、朱でなぞってあるので、朱で統一を計ろうとしたかとも思われる。首巻のためか、虫損の上に破損も多く、特に末尾四丁は下半葉分ほど欠けているので、「空心」の署名の有無は不詳。

2 帚木。樹形本、本文十行。前述のように表紙に寛永六年云々の墨書が日付まであるのは写した日か。朱注が全体にまばらにあるが、本文を段落に区切り、そこに合点を施して、「一たん」「二たん」と注記しているのが、他の巻に例を見ない。三段まで注記して再

び一段に戻り、十八段で途切れている。本文五十九丁中の、第三十七丁表で終っている。講義などの聞書のようにも見えるが、間隔が区々としてるのが不審である。署名はない。虫損甚しく、表紙は離れている。

3 空蟬。小本、八行。元表紙中央に「うつせみ」左下に「三巻」と打付書。墨注を朱でなぞってある部分もあるので、墨注、朱注の順で施されたのであろう。空心の署名あり。注の一部を切り落している。

4 夕顔。中本、七行。元表紙中央に「ゆふかほ」左下に「四巻」と打付書。空蟬を含めて、朱墨注ともが多い。署名なし。

7 紅葉賀。小本、五行。元表紙外題「もみちのが」とあり、下半葉ほど欠損しているが、「巻」の一部が見えるので「巻七」と打付書があったのであろう。漢字への振仮名を頻りに墨で加えているが、傍注はすべて朱で、やや多く施されている。「空心」とある。

8 花宴。小本、五行。元表紙に外題なく、その裏から墨注。全体数個所に短い傍注を見るのみで、朱注はない。なお「元表紙」としたのは、あるいは元来遊紙で、その前に更に表紙があった可能性もあるが、以下同様に述べる。

9 葵。大本、九行。元表紙中央に「あふひ九」とある。引歌など僅かな朱注と、稀に朱の合点、濁点を見る。署名なし。

10 櫛。小本、五行。元表紙なし。二箇所墨注と、朱で一部に句読点、濁点を施す。「空心」とあり。

11 花散里。小本、五行。元表紙外題「花ちるさと」、墨で振仮名あり、朱の傍注がやや多い。「空心」とあり。

13 明石。大本、八行。元表紙を欠く。本文冒頭数丁に破損があり、特に最初二丁に大きな欠損があるから、落ちたのであろう。わずかの墨注と、稀に朱の合点を見るのみ。「空心」とあり。

14 濡標。小本、五行。元表紙外題「みをつくし」、朱の傍注が多い。「空心」とあり。

15 蓬生。小本、六行。元表紙に外題なし。その裏から朱注。全体にやや多い朱注と、わずかな墨注を見る。「空心」とあり。

17 絵合。小本、五行。元表紙外題「まあはせ」、元表紙見返しに墨注。朱墨いずれの注もややあるが、前半に朱が多い。後半、墨注の上を朱で一部なぞる。「空心」とあり。

18 松風。小本、六行。元表紙に外題なし。裏から朱注。朱墨の注多し。一部、淡褐色の文字を見る。署名なし。

- 19 薄雲。小本、六行。元表紙外題「薄雲」、更に遊紙一丁、裏より朱注。朱注多く、墨注なし。「空心」とあり。
- 20 朝顔。小本、五行。元表紙外題「あさかほ」、その裏より朱注多くあり、わずかの墨注も見。一部、墨注を朱でなぞる。「空心」とあり。
- 21 乙女。小本、五行。元表紙綴目あたりに「おとめ」と細書。朱注のみ多くを見る。署名なし。
- 22 玉髪。小本、六行。元表紙外題「玉かつら」、裏より墨注、第一丁に引歌一首を記すのみで、全体に朱注が多い。注の一部が切り落されている。「空心」とあり。
- 23 初音。小本、六行。元表紙外題「はつね」、裏より全体に朱注のみあり。署名なし。
- 24 胡蝶。小本、六行。元表紙外題「こてふ」。裏より、本文朱のみを見る。「空心」とあり。
- 25 螢。小本、六行。元表紙に外題なく、源氏本文三行を書きさす。遊紙か。その裏に墨注があつて、更に遊紙一枚、裏より本文まで朱注のみ見る。「空心」とあり。
- 26 常夏。小本、六行。元表紙に外題なく裏より本文に朱注のみあり。署名なし。
- 28 野分。小本、六行。すべて常夏と同じで、「空心」とあり。
- 29 御幸。大本、八行。元表紙に外題なく、裏より朱注、全体に多くを見る。「空心」とあり。
- 31 楨柱。小本、六行。元表紙外題「まきはしら」、更に扉紙一丁、「まきはしら」と内題を記し、裏より本文まで朱注のみを見る。「空心」とあり。
- 32 梅枝。小本、六行。元表紙に外題なく、裏より全体に朱注のみ多い。署名なし。
- 33 藤裏葉。小本、六行。元表紙外題「藤のうら葉三十三」、更に遊紙一丁、裏より全体に朱注のみあり。「空心」と署名。
- 34 若菜上。大本、九行。元表紙に外題なく、裏より朱注のみを見る。「空心」とあり。
- 35 若菜下。大本、九行。元表紙外題「わかな下」、遊紙一丁、裏に朱注。本文に多く見る朱注は色が著しく明るい。あるいは時を異

- にした書入か。尾葉一丁に墨注を見る。「空心」とあり。
- 36 柏木。小本、六行。元表紙外題「かしわき」、遊紙一丁、裏より朱注のみあり。署名なし。
- 37 横笛。小本、六行。元表紙に外題なく、裏より朱注のみ。「空心」とあり。
- 38 鈴虫。小本、六行。元表紙外題「すゝむし三十八」、朱注のみあり。署名なし。
- 39 夕霧。大本、九行。元表紙に外題なく、裏より朱注のみ見る。「空心」とあり。
- 40 御法。小本、六行。元表紙外題「みのり四十」、裏より朱注のみ。「空心」とあり。
- 41 幻。小本、六行。元表紙外題「まほろし」、遊紙一丁、裏より朱注のみ。「空心」とあり。
- 42 匂宮。小本、六行。元表紙外題「にほふ宮」、遊紙一丁、その表より朱注あり、全体に多く施されている。署名なし。
- 43 紅梅。小本、六行。元表紙外題「かうはい四十三」、遊紙一丁、裏より朱注のみを見る。「空心」とあり。
- 44 竹川。大本、九行。元表紙に外題なく、裏より朱注のみ。「空心」とあり。
- 45 桶姫。大本、九行。元表紙に外題なく、裏より朱注のみあり。「空心」と署名。
- 46 椎本。小本、六行。元表紙に外題なく、裏より朱注のみ。「空心」とあり。
- 47 総角。大本、十一行。元表紙は白紙。本文前の三分の一ほどは朱注、中ほどが墨注、以下は注を欠く。「空心」とあり。
- 48 早蕨。大本、八行。元表紙外題「さわらひ」、遊紙一丁白紙。朱の合点、句読点を若干見るが朱注なし。第七丁まで墨注あり。「空心」と署名。
- 49 寄生。大本、十行。元表紙外題なく白紙。注は一切なく、「空心」とあり。
- 50 東屋。大本、九行。元表紙外題「あつまや六」、遊紙一丁白紙。朱注のみやあり。「空心」と署名。
- 51 浮舟。大本、八行。元表紙外題「うきふね」、遊紙一丁白紙。注は一切なく、「空心」とあり。
- 52 蜻蛉。大本、九行。本文と異なる料紙の遊紙一丁白紙。注は一切なく、署名もなし。

53 手習。大本、九行。白紙一丁、注一切なく、署名なし。

54 夢浮橋。小本、六行。元表紙外題「夢のうきはし五十四」、遊紙一丁白紙。注一切なく、署名もなし。
なお源氏物語の本文は青表紙本系が殆んどであったが、ここではそれらを問題としては取り上げない。

三

書入は、一口に言つて湖月抄注記の影響が顕著である。初学的な、本文の主語などを示す「源」「てんし心」「かういの詞」の傍注は屢々見るところで、往々湖月抄とも一致している。また、元表紙もしくは遊紙の裏に書入のあることは前節で指摘した通りで、これらの殆んどは、その巻に關する総論的内容が語られる。比較的長文の橋姫の巻を例示し、併せて、湖月抄から、書入の各項目に対応する注の部分のみを対照して記してみよう。従つて湖月抄の引用文はその一部で、しかも原文の順序のままではない。

(伏屋旧蔵書入)

うたのことはをもつてまきのなとす也。うち十てうはむらさきしきふのむすめ、大二のさんみかきつぎたるといふせつあり。さりなからもちいず。うちのうちはわかこ(こ)にたり。あふちんでんわうの御子、あふささきの御子は、なにわにおはします。わかこと申。御とよをくらいつけ玉ふを、わかこあに宮をおきてわかくらいつかんこといかとて、さうせひし給けり。さてこそなにはの御こ御くらいつき給ふ。にんとく天わうこれなり。

一うちの八の宮、源しのすまの御るすに、あしきささきのは

(湖月抄注抄出)

卷名以レ歌号レ之。細宇治十帖の事、娘の大式三位が筆といへる説あり。師説不用レ之。細宇治と号する事、花鳥菟道稚子の事をひけり。花応神天皇の皇子兄は大鶴鷄のみことと申をさしきて、弟の菟道稚子を春宮にたて給へり。兄大鶴鷄は父の御定めのごとく弟即位あれとて難波に引籠り給へば、弟菟道稚子は兄に位につき給へとて、宇治へ引退き給……久しく生て天下を煩はさじとて態とかくれ給へり。さて宇治山に陟して大鶴鷄終に位につき給ふを仁徳天皇と申き。菟道稚子は兄に位をゆづり、八宮は冷宮院に東宮をこされ給ふ共に本意を遂ずして宇治

かり事ゆへにうちにもりたまふなり。わかこにたりと也。

一此まきかほる十九なり。廿一のふゆまでの事みへたり。

(朱注。句読のみ私に加う)

にのがれ給ふ。其跡似たる上、共に兄弟の事なれば為_ニ宇治卷_ト。細蕪十九歳より廿一歳の冬までの事みえたり。

湖月抄注は右の二倍程もあり、順序も幾分異なっているが、内容に関してはすべてを包含して、言い廻しにも類似点が指摘される。大体に、主人公の年令、巻名の由来や、ときに並びの巻その他にも言及するが、これらも、湖月抄を出ることがない。

源十六才のなつより十月までの事(夕顔)

此まきはしゆのならひ也。みをつくしよりまへのことあり。源んし廿五六からのことあり。すへのことには、ふたとせはかりふるみやになかめ玉ふとあり。(蓬生)

源卅六才五月なつの事あり。うたとことはをもつてまきのなとす也。(螢)

にはふ宮のならひ、あふしゆかねたるならひ。はるの事あり。ことはをもつてまきのなとす。かほる廿才。しひかもとの事もあり。まほろしより此まきまで十六ねんかとし月久しきなり(紅梅)

縦、横の並びを音読して、「しゆ」「あふ」と記しているのは、総じてこの書入が漢字をあまり用いないことと共通している。次に本文に施された傍注を見よう。桐壺の巻から、注釈書風に、上に源氏本文をあげ、一の下に書入を示す。

○いとやんことなききはにはあらぬか—かういになちなきゆへ也

○はしめより我はと思ひあかり給へる御かた—女御はう大しんのこ也

○めざましきものに—かういをにくむ

○いとあつしくなり行—かういわつらい

○いよ—あかすあわれなるものにおほして—てんし心

○もろこしにもかゝる事のおこりにこそ世もみたれ—やうきひの事。りさんにすいをあけるは、はうじによるしよくたうのじん

は、たいしんのため、よくめいひをしてくわてきをにせしむ。くわがうはもとかんのちうしん

○いとほしたなき事―かうい心

○御心はへたくひなきを―かうい心

○ちゝの大納言は―かういの

○いにしへの人のよし有にて―はゝのすちめよき人と也

○おやうちくし―ふたおやある人におとらす

○はか／＼敷おうしろみなければ―かういにあにもおとゝもなき事

○さきの世にも―てんしかういの

○いつしかと心もとなからせ給ふて―かうい御さとすみの事。てんしの心

○いそきまひらせて―いみあけて御しゆたい

○此御子―源

○此きみをは―源

○わたくし物におほしかしつき給事―ひそうのものならてはわたくしものにせぬ也

以下は省略して、引歌については別にこの巻のすべてを抄出しておこう。

○おとしめきつをもとめ給人は―そねむ人あまたといふ心也。なをきく（つゞき）にまかれるえたもある物をけをふききすをいふかわりなき

○なくてそとはかゝる折にやと―あるときはありのいさみににくかりきなくてそ人はこひしかるらん

○みたてまつる人さへ露けき秋なり―あきかせになひくくさはのつゆよりもきへにし人をなにくたへん

○やみのうつゝには猶おとりけり―うはたまのやみのうつゝはさたかなりゆめにいくらもまさるへきなり

○月影はかりそ八重むくらにもさわらす―とう人もなきやとなれとくるはるはやへむくらにもさはらさりけり

○松のおもはん事たにはつかしう一世の中にありとしられたかきこのまつのおもはんこともはつかし

○ゑにかけるやうきひのかたちは一花とりのいろねにつけておもふにもたくひなかりし人のおもかけ

○大液（大液）の芙蓉（芙蓉）未央（未央）の柳も一たいまきのふやうひやうのやなき、ふやうはおもてのごとし、やなきはまゆのごとし。これによつてい
かんのなみたをたれきらん

○あくるもしらてとはおし出るにも一玉すたれあくるもしらてねし物をゆめにも見しと思ひかけきや

以上すべて朱注であるが、最後の例のみは墨の上を朱がなぞり書きしている。内容的に湖月抄を出ないこと、また例をあげて示すまでもないが、湖月抄を出ないことが、契沖書入を否定する理由にならないことは、源偶篇を見れば明らかであろう。いわんや源偶篇以前、即ち四十六歳より遙か以前の若い契沖が湖月抄によって源氏を学び、ありあわせの写本にそれを要約したり、一部を採って書入れたことは十分に考えられることで、「空心」と署名のあるこの本がそれである可能性が完全には言えない。筆跡も稚いものを見ることは、宝山寺蔵の聖教類奥書を見ても経験することではあるが、どうも腑に落ちないのである。

まず、いずれの引歌も典拠を一切示していないのは、どうしたことであろう。桐壺の巻に限らず、全体的に見られる傾向であるが、これは、現存する契沖の注釈書はもとより、書入本の方法と全く相容れない。契沖の注釈の本質を一口に言うのは危険にせよ、その柱の一つに、典拠の例示、羅列があることは認めて良いであろう。この時代、契沖ひとりに限った傾向とは言えないが、一つの言葉の解釈でも、例歌、例文をあげることによって、おのずから解くという趣きがある。従つて、それがいずれの作品にある歌か文かの典拠は重要な意味を持つわけであるのに、ここでは、例歌さえあげれば、出典には関心がなくかのようなものである。湖月抄では勿論それぞれの典拠を示しているのであるから、それに依りながら、出典は故意に省いたとしか思えないであろう。いくら若年でも、契沖のものとは思
いにくいのである。

次に、漢字、漢文の引用を皆ひら仮名書きにしまつているのは何故であろう。周の幽王が褒姒を寵した故事は湖月抄所引の細流抄注にも引かれているし、長恨歌に至っては言うまでもないが、中国の固有名詞をこのように仮名に改めては、紛らわしくわかりにく

い。これも意識的に、仮名書きの物語ゆえに改めたかと推察するほかはあるまい。夙に僧籍に入り、経文、従って漢字に親しんだ契沖としては、これも若年だからと言って容認できそうにないのである。これが固有名詞に限らぬことは、さきの並びの「しゆ」「あう」でも見た通りで、他の巻でも、「くわんもん（願文）」「ふんへつ（分別）」など枚挙に遑がないであろう。

湖月抄の影響が濃いと述べた源偶篇にしても、以上の傾向はいささかも見られない。遊仙窟、日本紀などの訓を、和語解釈の傍証に持ち出しているのなど、後の傾向の芽ばえが顕現している。長恨歌を含む漢文や、記録の引用が漢字を以てしているのは当然である。

ただ、仮名遣いになると、源偶篇はあやしげであつて、後年、この方面で功を積み、自信を注記までして古今余材抄や勢語臆断を執筆した契沖の本領はまだ発揮されていない。即ち貞享二年の契沖の用字法を見る上で興味ある自筆本と言えるわけではあるが、一方、こちらの源氏物語書入本の仮名遣が、更に源偶篇の比ではなく乱れているのは、例文を見れば理解できるであろう。

契沖にも稚い時期はあつたに違いないが、それを理由とするには、説明し切れないものをこの書入は語っているように私には思える。契沖年譜を見、成長を辿る中で、これがいずれの年にも定着しがたいように思う。空心なる署名が、まさしく契沖を意味しているとすれば、この本は契沖手沢本と考えるほかないようである。ただそうすると、契沖が親しく繕いた本に、書入を自身していないのが不審である。署名までしていれば書入自在の本であつたらうに、いずれにしても問題は残つてしまふ。そして、こここの「空心」を契沖とは別の後人か、とする臆測は、伝来の上から見て、また許されないのであろう。確かに言えることは、源註拾遺と比較して、契沖の源氏学の成長過程を追求する上の材料となしがいばかりでなく、源偶篇と比較するのにも、接点が見つけにくいことであらう。源氏は長篇であり、書入も多いので、私の調査の不行届が後に改めさせられることを期待したが、今の段階では、以上の結論に達してしまふ。若沖たちが見た、源氏物語契沖書入はどこへ行つたのであろう。

最近古書店で、戦前の古書目録を見つけた。巖松堂書店古典部が昭和十六年四月に発行した新収古典籍発売目録「古典」第三号である。この二五頁に「契沖書入本『源氏物語』美濃五十四冊 参百円」とあつた。あいにく写真が載っていないが、次のような説明文が

添えてあった。

承応版本に毎冊内表紙に先づ源氏の年時を記し本文に於ては一語一句と雖も苟しうせず、一々其の意義前後の關係大意語意を解剖考証して傍書頭註し、書入其の儘が源氏語彙の研究書であり、源氏の全般的な内容研究書としての形式を具備せり。而も其書入は一再に止らず幾度か含味考究を経たるものにて前回書入れしものを後度消除改訂せし箇所も少からずあり。本表紙完全。

承応板本とあるからには、まず伏屋旧藏本でない。契沖筆跡であることを全く疑っていない書きぶりに、多少の不安がないではないが、三百円という価格は、当時としてなかなかの水準である。同じ目録に、嵯峨本の伊勢物語が三五〇円で出ているし、寛永頃の伊勢の写本では三十円という時代である。奥書はないらしいが、敵松堂としては自信を持った値段なのであろう。注目すべきは内容の説明である。特に「書入は一再に止らず」以下がいかにも契沖の方法である。考証が多いらしいのも契沖に似つかわしい。書店が加えた広告文としても、事実のありようは記されている通りなのであろうから、いずれをとっても契沖にふさわしいことが、これこそ契沖自筆書入本源氏物語に違いないと思わせる。是非にも見たいのである。

昭和十六年と言えば、当然、久松博士も気づかれて良い筈であるのに、ついぞ伺ったことがない。また、いずれからも学界への報告がなされていない。やがて戦争に入ったのであるいは戦災で焼失してしまったかと不安でもある。つてを頼って調べてもらったところ、当時敵松堂古典部に従事していた者三名の内、二人が既に亡くなっていた。健在のS氏にようやく辿りついて尋ねると、氏もその本には確かに記憶があると、値段まで言われた。しかし売却先はしかと記憶がなく、恐らく四つの内に入るであらうという。三十五年も以前のことである。一つは尊経閣文庫、一つは国学院大学、一つは源氏学者であった故人のI博士、もう一つは書誌学者K博士が知合いの大和の人ということであった。経過を細かく語っても致し方がない。それらを、知己の方を通して一つづつ調べて頂いてはみたが、要するに、往時渺茫として今までのところ見当らない。

源註拾遺の元になった書入本は、湖月抄を台本としたであらうと思う。しかし、契沖が源氏物語の注釈を志したであらうことは、他の注釈書への源氏の引用が多いことでも想像できる。結果として、長篇であった故か、湖月抄批判とも言うべき源註拾遺を草したのが

晩年であり、独立した源氏物語の注釈書が遂に成らなかつたのではないかと思う。従つて、書入本の源氏、その台本が通行の板本であれば、古今六帖の例などから考えて契沖に似つかわしいことであり、そこには、湖月抄の論及にかかづりあわない創見があるかも知れない。ないものをとかく考えめぐらしても仕方がないが、契沖の書入本が今次の戦災から焼失を免かれて無事いづれかに存在し、世に紹介される日のあることを祈りたい。